

矢野は思い当るふしがあるように頷いた。

「大隈さんも閑職になって福沢に刺激されたのかもしれぬのう。何もかも動き出すわい」

「じっとしてはおれぬのう」

思わず矢野は溜め息をついた。

「そうよ。日本が動き出すというのに、のんびり寝ている奴があるか」

沼間の激励に矢野は自然に頭に手をやった。

「ところでこれはなんじゃい」

沼間は傍の本を手を取った。

「ほうーギリシャ史か。相変らず勉強家じゃのう」

「こういう時でもなければ、本を読む暇もない」

「そうか。立憲政体のあり方を外国に学ぶか。寝ている暇もないのう」

沼間は高笑いしたが、沼間自身、矢野の勉強家には感心し、矢野は一瞥して真意をくみ取る沼間の学識と見識には尊敬していた。

「ところで茂吉。報知も書き手が揃ったが、余り俺のところを出しぬくと承知せんぞ」

珍しく沼間の商売気のある発言に、三人はどっと笑っ

たが、当時、東京日日の福地に対抗する論説家として、藤田の文才は二人とも認めるところであった。

表紙解説 血盆塔(けつぼんとう)

場所 宇目町大字千束字豊藤 宝光庵
年代 推定 江戸時代末期
地上高 一四〇センチ

仏教大辞典(織田)によると、血盆経。又は女人血盆経。また地藏本願経に飲血地藏を説けるをもつて、支那の人、日蓮正教血盆経と云うを作り、本朝古代の禅僧またこれを擬作して、女人血盆経と名づけ、曹洞宗の授戒会などにこれを女人に授興す。

(孝感冥禅録上注)享保十九、(鹿谷宝洲注)。に世に杜撰の女人血盆経あり。誰人の妄造せるや中略・・・然れども異朝にも久しく行わると見えたり、緒経日誦といへる唐の書にもまた、この経を載す。現行の血盆経は應永(一三九四―一四二八)の頃下総国我孫子町正泉寺の和尚の感得せし由、彼寺の縁起に見ゆ、とある。

医療施設のなかった昔の人達は信仰によるほかなく、たまに医者が居ても一般庶民には無縁の存在であった。血の道の病気に苦しんだ婦人たちによって造立されたものであろう。

写真並びに説明 軸 丸 勇